『日野菜プロジェクト』の取り組みの評価

Evaluation of " Hinona project "

川本　治雄
KAWAMOTO Haruo
（和歌山大学教育学部）

小嶋　和宏
KOZIMA Kazuhiro
（滋賀県東近江市立愛東南小学校）

滋賀県日野町立南比都佐（みなみひづさ）小学校で始まった日野菜を見直す取り組みが地域に広がり、地域の人との繋がりの中で、伝統の食文化が守られようとする実践に発展した。このような地域への広がりを持つことができるようになったのは、どのような視点に基づいて、どのような目標の下に、どのような活動が行われたのか。実践を振り返りその意義を確認する。

キーワード：日野菜　地域教材　地域　総合的な学習　まちづくり

はじめに　ープロジェクトで日野菜を守れー

滋賀県日野町立南比都佐小学校は、『総合的な学習の時間』の中心的テーマとして、日野菜を守り広める『日野菜プロジェクト』に取り組んできた。子どもたちは学年ごとに日野菜を育てるのはもちろんのこと、日野菜の代表的な漬け方「桜漬け」「海老漬け」「ぬか漬け」を地域のお年寄りに教えていただき、卒業までに”日野菜漬けフルコース”を習得することになっている。

さらに、日野菜を広めようと五年生は冬から初夏にかけて母本を育て採取した日野菜の種を全国に発送し、インターネットを使って各地との日野菜交流を図っている。こんな取り組みを進めているさなかに起こった「日野菜の危機」、子どもたちにとっては黙ってはいられない事態だ。日野町に育った日野菜、なんとかこの歴史ある伝統野菜を救いたい、という子どもたちの願いが渦巻いた。地域に向けて開かれた「日野菜サミット」（2003年5月）で、子どもたちは日野菜の継承を地域に訴え、反響を呼んだ。

こうして今、逆風に押されながらも地元で種作りを引き継ごうというグループができたり、日野菜を元に町おこしを進めようとする動きが起こっている。家庭に日野菜の味を引き継ぐ「親子日野菜漬け教室」も行われてきた。小学校で始まった日野菜を見直す取り組みが地域に広がり、地域の人との繋がりの中で、伝統の食文化が守られようとしている。

1.『日野菜プロジェクト』の始まり

滋賀県の南東部にある日野町は小高い山に囲まれた谷の中にある。ちょうど手のひらを広げたように五つの谷が延びている。その最も南よりの谷で、鈴鹿山脈につながる山に挟まれているのが校区である。春になるとこの小高い里山の新緑をいっそう強調するかのように、山裾に鮮やかな黄色い花が咲く。遠目には菜の花にしか見えないこの花が、実は日野菜であり、五百年以上も前に日野町石楠花谷で蒲生貞秀（戦国時代の武将蒲生氏郷の先祖）によって見いだされ、漬け物用の野菜としてこの地域の人々によってずっと守られてきたことを聞き及び、調べるうちに「総合的な学習の時間」のテーマとしての奥深さを感じて取り組んだ実践である。

この日野菜の学習を子どもたちと進めることで、ふるさと日野が作り出した”日野菜”の味わいと歴史、そして、それを守っている人々の苦労を理解し、インターネットを使って、その”日野菜の味”を全国に広げる働きかけが、子どもたちの力でできたらすばらしいと考えた。

2.『日野菜プロジェクト』のねらい

日野町南比都佐地区は、日野菜の歴史の中でも谷を利用した地形で日野菜の原種を守る種栽培が行われていて、まさに日野菜のルーツである。この地ならではの特色を生かした『日野菜プロジェクト』としてのね

らいは次の三つである。

①この郷土の歴史から生まれた特産物を調べる取り組みを通じ、子どもたちにこの地域やそこに住む人々の生き方、そして、その文化を知り、郷土に誇りを持つ子どもを育てる。

②インターネットを使った情報発信で日野菜を全国に広めるとともに、他の学校・機関等との交流を深め、情報活用能力や問題解決能力を高める。

③自分の考えをしっかり持ち、伝えられる豊かな自己表現力や人と接するコミュニケーション力の向上をはかる。

この３点のねらいのもとに、具体的な学習活動として次の４点を定めた。

①特産物「日野菜」を守るとりくみ（体験学習）を通じ、地域やそこに住む人々をより理解する。

②全国に日野菜の種を広め、日野菜漬けを知らせ、日野菜を味わうことを通してつながりを持つ。

③日野菜の育ち比べを通じて、気候の違いや文化の違いを知る。

④種を広めることによって､各地の人と交流を図る。

3. 日野菜プロジェクト』実践のようす

１）Web の利用によるプロジェクトの成立

この『日野菜プロジェクト』の取り組みは２０００年に始まる。農家の名人に指導を仰ぎ､日野菜を育て、漬け物作りにも挑戦した。その一方で、この土地の名前のある菜を「全国に有名にしよう！」と三年生の子どもたちは『日野菜探検隊』の Web 作り取り組んだ。

２００１年には、地元で守られてきた歴史ある日野菜の”種”栽培に挑戦し､採取した種は各地の小学校に送り栽培を依頼した。これは「気候や土壌によって日野菜のできがちがう」という地元の人たちの言葉を検証するための試みであり、同時に、交流学習を通じて日野菜を全国各地の人に知らせる目当てを持っての取り組みである。

違った土地での日野菜の育ちは学校ホームページの Web『日野菜プロジェクト』で公開し、交流校からも各地の様子が分かるようにした。また栽培にあたっての質問は、子どもたち自身が地域に出かけ農家の人々に聞き電子メールで返答したり、Web 上に日野菜相談所を設け掲示したりした。さらに、収穫後の食べ方等についても『日野菜探検隊』の Web で情報提供をし、子どもたちが作った Web が幾重にも活用できる学校ホームページになった。

２）学習の展開

「総合的な学習の時間」の中心的なテーマとして位置づけた『日野菜プロジェクト』は四年生から五年生にかけて次のような①～⑦の観点で学習活動を展開している。

①日野菜の栽培と漬け物作りの体験

地元の日野菜名人にゲストティーチャーとして依頼し、日野菜を育て、漬け物にして食べる。単に知識としてだけでなく名人の鍬づかいや種まく姿から子どもたちは学ぶ。このことを通して、日野菜についての興味や関心を強く持つ。

②日野菜についての調べ学習

自分たちが育てた日野菜はいったいどんなものなのか、食べ方に限らず、漬け物工場や日野菜を売っているお店などを見学し、子どもの疑問を大切にしながら調べる。

③日野菜調査＆栽培協力の依頼

「いったい日野菜はどれだけ知られているのだろうか？」子どもたちの手で､全国の小学校に向け”有名度調査”のメールを発信する。学校検索には｢インターネット教育」（大阪教育大学）を使う。かたよりのないように全国各地に発信し、子どもたちにのメールには、教師の作った趣旨書を添えて思いが誤解なく十分に伝わるような工夫をしている。また、メールの最後には自分たちが作った日野菜の種をお礼にプレゼントすることを書き加え､後の交流への足がかりを作る。

④種作りと全国への種送付

日野菜は冬の始まりになると収穫を迎えるが、同時に翌年のタネ作りも始る。ゲストティーチャーの種名人の手を借りて、１２月から５月にかけて種栽培を続け、６月には種ができる。その種をアンケート等で関係を持った学校へ送り、日野菜の育ち比べの交流を申し出る。交流相手が見つからないときは、教育関係の研究会等、ことあるごとに種を持ち歩き、学校での取り組みを紹介して、相手校を見つける等の取り組みを進めた。

⑤交流校と情報交換

交流に同意の得られた学校とインターネットを介して交流が始まる。ただし、日野菜の育て方などこちらからの情報は一方的にでも送るが、相手校は学年が違ったりしてそれぞれが事情もあるので、過度の負担にならないように配慮をしている。唯一の条件は、収穫できた日野菜のデジタル写真をもらうことである。この時、交流の一番最初には、学校ごとに交流するグループの写真を添付し、挨拶メールを送るなど顔の見える交流になるように工夫した。

⑥地域の人々との交流

交流校から投げかけられた疑問は、子どもたちの手で解決できるものもあれば、その道の名人に尋ねなければ解決できないものもある。５年生では、名人の世話を離れ自分たちで日野菜を育てている。いざやってみて、本葉が出てまもなく、虫に葉を食べられて大打撃を受けるなどうまくいかないこともあった。「どう

やったらいいの？」。こんな疑問も含めて地域の人々に子どもたち自身が聞き取りに出かけ、それをメールやweb「日野菜相談所」で答えることに発展させ、子どもたち自身では気付かない課題を交流によって意識できることにもなった。

⑦学習成果の発表

各地での栽培結果は、大きい小さいはあるものの、赤と白の部分もそれなりにわかれて日野菜ができ、調理後の感想も好評であった。各地の味は食べ比べられないので、残念ながら分からないが、子どもたちは、自分たちの日野菜がいちばんおいしいのだと信じている。こうした日野菜交流を通じて、各地の気候や風土が違うことにも気付くことができた。こうした、交流の成果を校内や地域のみなさんにも報告する機会を持った。

児童集会での報告では、下級生が５年生の報告に耳を傾けた。また、この取り組みはテレビでも何回か放送されいて、地域も学校の取り組みに注目をしている。２００３年５月には「日野菜サミット」と称して、行政の”日野菜で村おこし”とも連携して、地元の公民館で報告会を持った。このような報告会は、子どもたちの学習に協力していただいた地域への情報発信の場でもある。

３）学習としての展開事例

ここで、具体的な「学習としての展開」事例を取り上げる。これは、５年生の総合的な学習として取り組まれた学習の事例である。

５年『日野菜プロジェクト』
―インターネットで交流しよう―

①日野菜プロジェクトについての基本的な考え方

○指導に当たって

５学年にとっては、日野菜への関わりは、３年生の地域学習で特産物・日野菜について調べ学習を始めて以来の三年間に及ぶ学習である。今年度は自分たちで育てた日野菜の種を採取し全国に各地に配り、気候や土壌によって育ちが違うと言われる日野菜を調べる学習に取り組んでいる。この取り組みには、日野菜の育ち比べを通じて全国に種や日野菜を広めることで、郷土の特産日野菜を全国に広め有名にしようという子供たちのもくろみがあり、郷土への誇りをいっそう深める学習でもある。

九月になって学級園に自分たちの日野菜の種をまき、日野菜の育て方や食べ方を地域の人から教わったり、調べたりして問題解決的に学習を進めてきた。また、同時にその情報を種を配った学校に伝えて交流を図っている。調べたことを伝える相手を持つことで、より深い理解が必要だし、より正確な情報が求められる。また間違いのないよう正しく伝える工夫も必要である。このことで学習で得た知識が生きた知恵となり、学びが生きる力となることをねらっている。

インターネットを利用することで、遠隔地の学校と気軽に交流でき、コンピュータリテラシーを中心とした情報活用能力を高められる。子どもたちにとって今回のメールの発信は二学期に入って四回目になり画像の添付も覚えて、次第にメール操作にも慣れてきた。ただ、インターネットに接続できる機器が少なかったため、全員の子どもたちの操作を高めることが出来なかったので、本時に向けて端末を増やしより多くの児童がパソコンを操作できる環境を整え取り組んでいる。

この取り組みには、作物を育てる体験や、地域の人々から情報を集める活動や、パソコンでの他校との交流など盛りだくさんの活動がありそれぞれに楽しみながら取りくんでいる。が、なんと言っても一番の魅力は、学習の成果として収穫した日野菜を自分たちで漬けて食べられることである。学習の評価として日野菜の味が自らの口におさまり自己評価できるわけで、子どもたちは意欲を持って取り組んでいる。

○他教科等との関連

『総合的な学習の時間』の取り組みにおいて、確かな学力、生きる力の育成から、各教科との関連を大切にした取り組みが必要だが、以下の学習との関係を大切にしたい。まず、理科では「花から実へ」の学習とあわせて、日野菜の種の収穫に取り組んだ。アブラナの花のつくりと同じ日野菜の花から実が出来ていく様子を観察し、黄色い花に群がるミツバチが受粉にとって大切なはたらきをしていることを学んでの収穫であった。さらに「植物の発芽と成長」で肥料や日光が日野菜の成長に不可欠なことも育てる中で確かめることが出来た。

また、社会科の「私たちの国土」では、日本の気候や暖かい土地と寒い土地について学習する。日野菜という植物を通して気候や風土の違いあるいは地図の上で知識としてのちがった土地を、自分とのつながりの中で実感して捉えていけるようにしていきたい。「私たちの食生活と食料生産」では地域の条件を生かしていろんな野菜が作られている様子を学習するが、当地の日野菜作り通して農家の仕事の体験的理解を図れる。さらに「私たちのくらしをささえる情報」では、インターネットを使って学習する際に、情報を発信する立場から、情報化社会と私たちの暮らしを考えさせていきたい。

この他、家庭科「わたしたちにできることは」や「つくっておいしいものを食べよう」と合わせて取り組み、漬け物作りをすることでかんたんな調理に挑戦し、さらに味付けを工夫することで自分たちの食生活を見直す機会としたい。そして、一連の取り組みのをまとめ

としては身近で興味を持っていることについてさらに調べたり考えたりしたことを作文に書く国語科「新たに発見したこと」の学習を生かしていきたい。

②『日野菜プロジェクト』の目標

◇日野の特産物日野菜を育て広める活動を通じて日野の食文化を理解し誇りを持つ。
◇日野菜を守ってきた南比都佐地区やそこで暮らす人々をより理解する。
◇全国に日野菜の種を広め、日野菜を知ってもらい、日野菜漬けを食べてもらう。
◇日野菜の育ちを通じて、日本の各地の気候や文化の違いを知り、国土を理解する。
◇種の広がりを通じ各地の人との交流を図る。
◇インターネット等で情報を発信、収集し、情報活用能力を高める。

③『日野菜プロジェクト』でつけたい力

○日光、肥料、水など植物の成長に必要なものが体験を通じて確かめられ、日野菜が育てられる。
○インターネットのホームページ閲覧やメールの操作等ができ情報が収集できる。
○知らない土地の人たちとインターネット等を通じて適切な情報交換ができる。
○地域の人々に出会ったり、教わったりしながら情報を収集することができる。
○集めた情報から必要な情報を選び相手に分かりよく伝えることができる。
○地域の違いによって日野菜の出来がちがうことからその原因を探ることができる。

④取り組みの成果と課題

南比都佐小学校の「総合的な学習の時間」の中心をなす『日野菜プロジェクト』の一コマとして、交流校との情報交換の公開授業をもとに、蒲生郡内の情報教育について研究を深めた。

まず、「日野菜」という地域の特産物を生かした総合的な学習の中で、情報教育が取り組めていることへの評価や、授業の始まりに日野菜の実物を提示したことで、何の情報を送るか共通意識ができるなど実物の大切さが説かれた。メール交換の場面を取り上げた授業そのものには、メールの発信がグループ単位でやることから手持ちぶさたの児童が出たことや、課題を十分把握していないグループがあったなど指導者の配慮が必要なところが指摘された。一方、相手を意識して児童がメールの表現を工夫していた様子やデジタル写真とあわせて送ることで文と写真をつなぐ力（情報を選択する力）が求められるなど情報活用能力の育成につながることがあげられた。さらに児童のメールを途中でプロジェクター等で投影し全体で吟味する場面が設定できるとよいという指摘もあった。

つづいて、郡内の現状交流の中では、「総合的な学習の時間」の中でパソコンのスキルを上げていくことの必要性が説かれた。また、南比小校内LANの整備報告から各教室のパソコンがつながることでパソコン室での学習の続きが手軽に教室で行えるなど必要なときに臨機応変に学習が進められることの利便性が報告された。さらにインターネットにつながったパソコンがコミュニケーションの道具として活用されることで、交流学習、共同学習など、今までには不可能だったコラボレーションがいっそう進めやすくなっていき、ソフトが十分になくても教育利用の幅は広がるだろうという方向が示された。

4.『日野菜プロジェクト』の実践を通しての効果

インターネットの特性を生かし、今後いっそうの発展が期待できるのが、この『日野菜プロジェクト』である。しかも、パソコン、インターネットという仮想社会にとどまらず、パソコンの向こう側には交流する相手がいて、絶えず地域に土台をおいて現実社会との行き来の中で実践できるところに発展の面白さがある。このプロジェクトから得た実践の手応えを紹介すると、次の通りである。

◇学校のホームページは作っただけで満足してしまいがちだが、「日野菜」というこの地域ならではの情報を発信することで、外部からも関心を持って見てもらえ、しかも交流校への情報提供の土台となる生きたWebにすることができた。
◇インターネットを生かした学校間交流をすることで、ホームページ製作やメール送信などコンピュータリテラシーが必然的に高る。今後、さらにいえばチャットやライブカメラを生かし、相手の見える交流へと進めていきたい。
◇交流に具体的内容があり、相手もはっきりしていることで、漠然とした情報発信にならず、目的意識を持って取り組める。特に電子メールの交信では、他校からの日野菜についての質問に対し、相手に必要な情報をはっきりとさせて集め、分かりやすく伝えるよう意識付けることができた。
一方で、他教科との関連の中で、子ども一人ひとりの情報活用能力をいっそう高めていく必要性もある。
◇地域の人々とのつながり、地域のよさを取り込み、無理なく地域の人に活躍してもらえる地域学習ができ、ふるさとのよさを知り、子どもたちはふるさとに誇りを持つようになった。
◇日野菜の育て方や漬け物の作り方を、地域のお年寄りから教えてもらうなど、地域の人々との交流が深まり、コミュニケーションの力を高めることが実践的にできた。

◇学習の中で日野菜が危機にあることを知り、地域に出て原原種（日野菜の大本）の植え付けの手伝いをするなど、子もたち自身が日野菜を守っていくことの大切さを認識し、行動している。

5. 実践のまとめ

2001年度は京都市立梅小路小学校の三年生の来校、そして2002年度はNHKでの全国放送という機会を得て、日野菜の輪がひろがり、「日野菜を有名にしたい」という子どもたちの願いは着々と進んできた。なによりもこの子どもたちの取り組みをきっかけに地域が日野菜を守るために動き出そうとしているのは最大の成果である。この『日野菜プロジェクト』を通じて子どもたちに育てたいのは、自己表現力や学習への積極性であった。小規模校の本校は単級で同学年での学級間の交流ができないが、インターネットを利用することで外の世界との交流が可能になった。日野菜という地域の誇るべき特産物での交流を通し、自分の地域に自信を持ち、自分の意見や思いが伝えられるよう子ども達が着実に育っている。

『感動！大地の恵みと海の幸』（２００３年３月２２日・ＮＨＫ放送センター：東京）のスタジオ収録で、「日本一おいしい日野菜漬け！」と堂々とアピールする子どもたちに覚えた感動とともに２００５年の現在も『日野菜プロジェクト』は取り組まれている。

6.『日野菜プロジェクト』の取り組みの意義

１）地域再発見による「まちづくり」と日野菜

地域の特徴や特質を代表するような「モノ」を見つけ出すことは結構難しい。それは地域に暮らしている人からすればあまりにも日常的なくらしの中にあるからであろう。生活に溶け込んでいるがゆえに，価値あるモノ･意義あるモノとして改めて認識することが少ないからである。

琵琶湖東部の山あいに位置する滋賀県日野町立南比都佐小学校での「日野菜プロジェクト」の取り組みは、今、注目されている「エコツーリズム」や「エコミュージアム」また「フィールドミュージアム」に通じる「地域再発見」の取り組みと共通するものでもある。

生活の中の文化を掘り起こし､意義付け､地域の「宝探し」の実践として具体化した事例である。現在、日本の各地で，こうした「地域資源」に焦点を当てた取り組みが、まちづくり、むらづくりの核として進められている。まちづくりやむらづくりはその推進の重要な面を地域住民による「地域資源」の発見や再発見・意義付けが握っている。特に、近年日本でも多くの地域で広域的に展開されている「エコミュージアム」という取り組みの根幹を形成している。１）

「エコミュージアム」は、「地域まるごと博物館」とか「屋根のない博物館」というような呼び方で呼ばれ、地域の「宝探し」等の取り組みを展開しながら、地域住民による地域の持つ価値の共有と地域住民のみならず、ビジター（観光客）への発信を「地域案内人」の活動を通して展開し、そのことによって、地域住民が元気になり、地域に活気が取り戻されていく総合的な取り組みとなる。いわば、「地域資源」の共有による、地域の活性化を図る中でのまちづくりの取り組みの側面を持っている。

このような取り組みこそ学校教育の中に位置づけられ、未来の地域の主人公である子どもを主権者として成長させる糧となる。

２）総合的な価値を持つ日野菜の再発見

「日野菜プロジェクト」の推進の中心となった小嶋教諭（現　滋賀県愛東南小学校）は、，深山口周辺での春先の「雑菜刈り」の風習に疑問を持ち、調べていくうちに地域の「日野菜」を守ってきた歴史の重さに感動を覚えている。アブラナ科の黄色や白色の花が深山口の地域から春先に姿を消して日野菜の花だけになるという事実に直面し、疑問を持つという感性のみずみずしさに私は感動した。地域に根ざす学校や，地域に根ざす学習内容の創造とはこうした「地域に開かれた心のありよう」が大切され、このことが原動力となって「地域教材」が開発されなければならないと常々考えてきた。それは、地域教材を子どもの身近にあるものだからという点に重点をかけて手段として利用していく考え方は地域教材を本当の意味で教材化したことにはならないと考えているからである。地域教材を学ぶことで、典型的な教材を具体的且つ個別の分野として教科の枠にとらわれることなく、総合的に学ぶことにこそ意義がある。

ともすれば，一面的な基礎・基本の重視の流れの中で、教科書の中の教材を、如何に効率よく子どもに理解させるか（伝達するか）という点にのみ関心が向けられている昨今、子どもに伝えなければならない、また、伝えたい「文化遺産」は何かという問いかけが非常に重要である。

学校教育の役割として、基本的に持っているのは、教科という形で整理され、人類が培ってきた「文化遺産の継承」である。最近は，どのように培われてきたかと言うプロセスを体験的な学習を通して行わなければならないということが強調されてはいるが、文化遺産の継承が結果だけではなく，文化遺産形成のプロセスも重視すべきだということであって、基本は変わっていないことは確認しておかなければならない。２）

小嶋教諭の2000年の南比都佐小学校への赴任をきっかけに、地域の持つ特性を「日野菜」で代表することができるのではないかという着眼点のもとに、聞き

取り調査や文献調査、栽培体験学習、情報を積極的に位置づけ活用する学習等、多くの視点から検討を加え学級・学年の取り組みから全校の取り組みへと広げ、深めていった。さらに、地域を巻き込んでの取り組みを「学校を開く」（学校開放の考え方）という実践につないで展開したのは、非常に重要な視点である。

３）日野菜の持つ総合的な価値

地域の中での新しい動きに関わって、日野菜の種づくりが危機に瀕しているこの地域で、子どもの学習展開とのかかわりの中で、種づくりを引き継いでいく動きが現れたり、日野菜による「まちおこし」の運動が、日野菜のお茶漬け新製品の開発となって具体化した動きが現れ、試作品「ひの菜ちゃん」が試験販売されるようになったことは特筆に値する。この動きは、学校の主人公の子どもが、地域に働きかけ地域を動かし「まちづくり」を提案したという把握ができる。また、親子日野菜漬け教室が地域公民館を会場に開かれ、家庭に日野菜の味を引き継ぐ動きを作りだすという食文化の伝承という側面を具体的な活動を通して担っている。

このように、「日野菜プロジェクト」として実践してきた子どもたちを中心とする取り組みが、学級・学年から学校全体に、そして南比都佐地域に、さらに日野町にと広がっている。具体的には、町行政による日野菜づくりを奨励する事業を「農林課」で立ち上げ町民（日野菜栽培農家）に対する財政的措置が講じられた。このような一連の取り組みを「小学校ではじまった日野菜を見直す取り組みが、地域に広がり、地域の人たちとの繋がりの中で、伝統の食文化が守られようとしている」と評価できる。

また、原原種を守り育ててきた地域の日野菜栽培農家の田中保男さんのことにふれて「南比都佐の谷で種を作りそれを鎌掛の谷で栽培されるなど、谷に囲まれたこの土地の気候や地形そして土壌をうまく利用して日野菜が育てられている。その意味で日野菜を学ぶことは地域を学ぶことである」というように、特に栽培条件（気候、土壌、風土などの自然的環境条件）と歴史的な特性（社会的環境条件）にかかわって日野菜の地域特性を押さえていることも重要である。

さらに、学習材としての日野菜の特徴を６つにまとめ次のように記している。

①「育てて収穫でき」、「漬けて食べられ」と取り組みの成果が子どもに確かめやすい。
②素材が比較的育てやすく作りやすくて、子どもたちの力に合っている。
③郷土に根付いた作物で地域の歴史や産業が理解できる。
④名人を中心として人との出会い、地域との出会いの中で学習できる
⑤栽培、漬け物づくりの他、日野菜に関する見学取材など、体験的な学習ができる。
⑥「日野菜プロジェクト」として学習のいろいろな発展が可能である。

この日野菜プロジェクトは社会科の授業と関連させて進められてはいるが、基本的な取り組みは１，２年の生活科、３，４，５，６年における総合的な学習に位置づけ全校で取り組まれているのである。ここでの、総合的な学習としての『日野菜プロジェクト』の意味（価値）を４つに整理できる。

①栽培からはじまり、歴史に至るまで、日野菜に関する横断的な内容が取り扱える
②地域やそこの人々との出会いを通じた体験的な学習ができる。
③「食べる」という日常生活に密接した文化だが、教科としての領域のないものが扱える。
④この学習をもとにいろんな発展学習が可能であり、ここで学習が完結しない。

教科発展学習としての総合的な学習の取り組みこそが、『日野菜探検隊』・『日野菜プロジェクト』としての取り組みであり、本来の「学び」の姿が確認できるのである。

このような整理をもとに、改めて日野菜の価値を検討してみると「食文化」「歴史」「情報」「まちづくり」の４つのカテゴリーを設定することができる。それぞれのカテゴリーの中での柱の立て方（重点の置き方）によって学習展開の方向が変わってくる。また、カテゴリー相互の関連をどのように図るかという観点からの検討も必要である。

実践の展開に際しては、子どもの実態や、保護者および地域の関係する人たちの状況に応じて展開に変化が生まれてくる。その年その年の地域の状況、人とのつながりなどによって展開を考えることになる。ともすれば、学校での教育課程として確定してしまうと形式が優先し内容が伴わなくなることが多くなり、子どもの学びが保障されなくなってしまう危険が常に存在する。こうした変化する実態をふまえた展開の違い（実践上の重点の置き方の違い）こそが、地域教材開発の「いのち」となるのである。

そこで、４つのカテゴリーに沿って、日野菜の持つ意義を次ページ＜資料１＞のように図式化して整理を試み、意義付けを図った。地域や学校のその年の実態をふまえた重点の置き方を検討することによって、様々な形での実践が可能となる。

４）「地域に開かれた学校づくり」とは
～学校を支える地域の動き～

地域に開かれた学校づくりというとき、様々な取り組みがありその評価も多岐にわたる。学校の中での教育内容が地域住民に理解され協力関係が築かれること

＜資料１＞

日野菜の持つ意義

＜食文化の継承と発展＞
食農教育の視点

①子どもと高齢者をつなぐ
②子どもと親とお年寄りの
三世代をつなぐ

家庭の味を引き継ぐ
●＝食文化の伝承
●（伝統の食文化の継承）

日野菜漬けの伝授
（三世代体験学習）
（おばあちゃんに教えて
もらった日野菜漬け）

＜日野菜を取りまく、
地域文化の継承・発展＞

①子どもと高齢者をつなぐ
（秋道さん夫妻のｹﾞｽﾄﾃｨﾁｬｰ）
（田中さんとの交流・原原種
づくりの危機と手伝い作業）
●歴史的な遺産と継承発展
原原種を守り育てる
●日野菜の固有種生産地域
としての日野町深山口地域
（固有種・ブランド化）
日野菜の歴史と全国への広がり
現在の「日野菜」系蕪の生産実態
（世界的規模での広がりの中で）

日野菜

インターネットによる情報発信
種の配布→全国各地の種まき
→日野菜の生育比較
（気候や土壌による
育ちの違い比較）
ホームページでまとめ発信
科学的な目で成長を記録し交流
●日野菜を通した交流学習
としての意義
京都市の梅小路小学校の
児童との交流体験活動

＜子どもの　自己表現力・
コミュニケーション能力育成＞

日野菜による「まちおこし」の胎動

南比の夢とパワーを集める会の結成
日野菜による日野町商店街の共栄会
によるお茶漬け製品開発・試験販売
開始
ＮＨＫ収録・放映2002年秋から→
日野菜サミットの開催2003年５月
●地域の人たちの繋がりを生み出す
●日野菜を通した
地域ぐるみのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝの成立

まちづくりとしての
＜地域のコミュニケーションの活性化＞

は、開かれた学校づくりの非常に重要な側面である。

授業を公開し授業内容について理解を促すという取り組みも多く行われ、一定の成果も上がっている。しかし、地域住民とともに教材にかかわり、地域文化を掘り起こし、支え発展させるという観点は、逃してはならない。このような視点から「日野菜」の持つ意味は計り知れないものがあり、南比都佐小学校の取り組みの「宝」となっている。

この取り組みを学校外から支えているのが「南比の夢とパワーを集める会」（井上重蔵　会長）である。この会は２００２年３月（平成14年３月）に当時南比小の岩脇教諭を中心に結成され、地域行事に取り組み生涯学習の観点から社会教育活動を展開している。幅広い活動を行っているが、日野菜についての活動も柱の一つとなり、学校の教育活動を側面から支え、日野菜原原種の保存活動にも一役買っている。

２００５年４月７日には、「『日野菜プロジェクト』の今までとこれから」というテーマに絞って会議が開催され、日野菜のフリーズ・ドライによるお茶漬けを商品開発した日野菜商店会の役員２名も迎え１３名の参加の下「日野菜プロジェクト」の取り組みの意義についての報告をおこない、活発な論議が展開された。

この日は、まず、日野菜プロジェクトの概要が小嶋教諭から報告され、日野菜をめぐるの現状についての意見交流をすすめた。この取り組みは、小学校の取り組みとして引き続いて２００５年度以降も取り組まれることが確認された。続いて、日野商店会（共栄会）前会長から新商品「ひの菜ちゃん」についての現状を聞き、日野菜の歴史的な調査報告等にも話が及んだ。こうした日野菜を核とした取り組みが地域とともに進められている意味をそれぞれの立場の人々が再認識し、より多くの人が共有化（共通理解）することによって推進力を得ている。

５）社会科地域学習における工場との関連
－「漬け物」）の持つ位置－

社会科における３，４年生の学習の中の地域学習の展開は、必修である。産業に視点をあてて教育内容をみるならば、「農業」「工業」「商業」（あるいは林業）が学習展開の窓口となる。基本的な枠組みは、「市民（町民）のつくりだす（生産する）もの」を扱うことになる。地域の典型的な産業を取り上げ、体験的な見学学習を行うことによって、生産の過程を具体的につかみ生産に携わる人々や生産されたものの動き、原料の動きを追うという展開になっている、多くの地域では、すでに作成されている「副読本」をもとに進められることが多い。

日野菜の場合はこうした観点から農業と工場（ＪＡの日野菜漬け物工場）さらには販売という商業を視野に入れた骨太の地域学習を展開することができる教材として位置づけられる。

中学年での取り扱う工業は、原料から製品への変化のプロセスが単純で３年生の目で追求可能なものにすべきである。それは、子どもの社会認識の発達段階から、具体的なものから抽象てきなものへの橋渡しの非常に重要な認識の飛躍を生む時期であるからである。見える世界から見えない世界へと取り扱う内容に深まりと高まりが生まれる。だからこそ、フィールドワークや見学学習、調査学習等の学習を体験的な学習として学習展開に位置づけなければならないのである。3）

おわりに

基本的な地域学習の展開を視野に入れ、３，４，５，６年で地域学習の発展としてその内容と関連を考えた総合的学習の展開は、子どもの本当の学びを保障する上で大きな意味を持っている。１，２年生の生活科も視野に日野菜に関する学習をカリキュラムの中に位置づけ、学校ぐるみで、総合的に展開するという南比都佐小学校の基本的な取り組みの姿勢は大切にしていかなければならない。それは、地域の生産に携わる人々とかかわり、小学校区の地域住民活動に位置づけ、商店会や町行政の動きも視野に入れた展開を図っている点である。

「開かれが学校づくり」が重視される昨今、まちづくりの中での学校の位置を意識し、未来の地域の担い手である子どもをどのように育てるかという展望あるビジョンを学校が持ち続ける努力をすることこそ「開かれた学校づくり」の出発点である。このような可能性のある取り組みの一つとして、この『日野菜プロジェクト』の取り組みの意義がある。

脚注

1）東北地方の山形県の朝日町は早くからのエコミュージアムの取り組みで全国的に知れている。朝日町の中には地域文化・歴史・産業・習俗・行事・景観等にかかわる施設や遺跡を道（道路）で結び、それぞれの拠点では「案内人」が活躍するという活動が展開されている。兵庫県の高岡のコウノトリを軸にしたエコミュージアム、三重県の宮川を繋がりの基本に押さえた宮川流域エコミュージアム、滋賀県における湖北地域のエコミュージアムの取り組みなど近畿圏でもその取り組みは進んでいる。私が直接関係しているところで言えば，2003年度より和歌山県龍神村を中心としたエコミュージアムの構想を具体化するために「地域住民」「むら行政」「ＮＰＯ」「和歌山大学」などが共同しながら取り組みを進めている。）

文部科学省地域貢献特別支援事業（2003,2004）

http://www.wakayama-u.ac.jp/renkei/

［地域資源を活用した紀伊半島みどりの地域づくり

支援事業］紀伊半島エコミュージアム構想の推進プロジェクト（代表　川本治雄）

2) マスコミを通じて学力論が叫ばれているが学力とゆとりとは全く対立する概念ではなく、生産的な論議に発展していない。何をこそ取り上げ、どのように子どもが学ぶのかを論議すべきである。その結果としての学びを保障するために「ゆとり」がどのように位置づけられなければならないのかが学力の本質を押さえた論議が必要である。今回のゆとり対学力の構図からは新しい取り組みは生まれない。

3) 認識（社会認識）の発達の系統表については、川本治雄「社会認識の育成と人権認識」(「八木英二・梅田修編『人権教育の実践を問う』大月書店 1992 年) 162 頁参照

参考文献

①近江日野町教育会編『近江日野町志』 発行者・片岡英三　　昭和５年
②南比都佐公民館『ふるさとの語り草』 深山口・田中嘉兵衛氏所蔵の資料
③瀬川欣一著『ふる里のむかし話』
④小嶋和弘「伝統の食文化を守る　日野菜五百年の歴史を引き継ぐ『日野菜プロジェクト』」滋賀県教育会編『近江教育』第 655 号　平成 17 年２月７日発行
⑤小嶋和弘「インターネットで全国に広める”ふるさとの味「日野菜」”」『NEW 教育とｺﾝﾋﾟｭｰﾀ』学習研究社　2003. ６月号

参考資料

◇『日野菜プロジェクト』交流校
’０１年度　黒石小学校（岩手県水沢市）古海小学校（長野県信濃町）清明小学校（福井県福井市）古瀬間小学校(愛知県豊田市)梅小路小学校(京都市下京区)
’０２年度　白沼小学校（山形県小国町）檜沢小学校（福島郡田島町）上野小学校（新潟県川西町）相川小学校（神奈川県厚木市）西谷小学校（島根県広瀬町）三丘小（山口県熊毛町）大野小学校（徳島県阿南市）
◇この『日野菜プロジェクト』の様子は，南比都佐小学校のホームページ以外にも次で確かめられる。
５年生の様子は，NHK 総合『たべもの新世紀』
(03.1.5 放映)
http://www.nhk.or.jp/t-shinseiki/back/syoku84.html
４年生の日野菜の観察記録は，NHK『食料プロジェクト：こども体験隊ネット』
http://www.nhk.or.jp/shokuryo/
ＮＨＫ総合『感動！大地の恵みと海の幸』
(’03.3.30 放映)

＜『日野菜プロジェクト』の実践について＞

本稿の小嶋実践については、『NEW 教育とコンピュータ』学習研究社 (2003. ６月号) と滋賀県教育会編『近江教育』第 655 号（平成 17 年２月７日発行）の日野菜プロジェクトに関する論考をもとに加筆・修正し編集したものである。なお小嶋和宏の実践は前任校南比都佐小学校での 2000 年度から 2004 年度の５年間の実践である。実践の分析は主として川本が担当した。